

BPCNPNPPP4学会合同年会

ランチョンセミナー19



JSBP



scnp

エビデンスに基づいた 統合失調症薬物療法:

抗コリン系副作用や
高プロラクチン血症などに
留意した薬剤選択

日時

2022年11月6日(日)
12:10~13:10

会場

第6会場

(都市センターホテル 7F 706)
〒102-0093 東京都千代田区平河町2-4-1

座長

嶽北 佳輝 先生

関西医科大学医学部 精神神経科学講座 准教授

演者

大矢 一登 先生

藤田医科大学医学部 精神神経科学講座 講師



一般社団法人
日本精神薬学会
The Japanese Society of Psychiatric Pharmacy



JSNP
SINCE
1971

開催形式 ▶ ハイブリッド開催 (現地開催+LIVE配信) ※オンデマンド配信なし

Webでご視聴の方は、合同年会HPへの参加登録が必要となります。

下記URLより参加登録をお願い致します。

URL <http://bpcnpppp2022.umin.jp/>

共催

BPCNPNPPP4学会合同年会 / Meiji Seika ファルマ株式会社

エビデンスに基づいた統合失調症薬物療法： 抗コリン系副作用や 高プロラクチン血症などに留意した薬剤選択

大矢 一登 先生

藤田医科大学医学部 精神神経科学講座 講師

統合失調症薬物治療において、抗精神病薬には急性期の精神症状への有効性に加え、維持期の再発予防効果も求められる。再発予防には、再発予防効果を有する抗精神病薬を高いアドヒアランスで用いることが重要だが、実臨床ではアドヒアランス不良となることも多い。維持期に精神症状が安定している場合には、抗精神病薬を用いることの有効性を実感しづらい一方で、内分泌代謝系の副作用や眠気など患者が実感しやすい副作用を呈する場合もありアドヒアランス不良の一因になっていると思われる。

本セミナーでは急性期はもとより維持期における抗精神病薬継続の意義について概観した後に、アセナピンの特徴である抗コリン作用、高プロラクチン血症、内分泌代謝系等のリスクの少なさなどについてまとめ、統合失調症薬物治療における位置づけを検討する。一方で、クロザピン以外の抗精神病薬の単剤治療で十分な有効性が得られない場合に、アセナピンをはじめ他の抗精神病薬を併用する意義などについてもエビデンスレビューする。